
眼球

z__deracine

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眼球

【Nコード】

N9301Z

【作者名】

z|deracine

【あらすじ】

「私」が見た夢の話。夢の中で目覚めた私は、起きるべき時間を2時間過ぎていることに気づく。絶対に遅刻の許されない、とても重要な研修のある日だったが、手遅れだった。とにかく連絡をしなければと携帯電話に手を伸ばした。

※他サイトに掲載。

夢の中で、私はベットに横たわっていた。少しの間ぼんやりしていたが、時計が目に入り、起きるべき時間を2時間も過ぎていることに気づいて、跳ね起きた。とても大事な研修がある日で、遅刻は絶対に許されなかったが、手遅れだった。とにかく連絡をしなければと、腕を伸ばし携帯電話を掴んだとき、自分の体がまったく見えていないことに気づいた。布団に触れている感触や、携帯電話を握っている手の感覚は確かにあるのに、手足はおろか、鼻の側面や目の下の頬も視界に入らない。視点は自分の意思とは関係なしに、ゆっくりと流れるように漂い、上下左右、ランダムに移ろっていた。手に握る携帯電話をなんとか視界に入れて、電話を架けることさえ出来れば、感覚で電話を耳にあて、話すことは出来るだろうと、視界が携帯電話を捉えるのを待ったが、視点は徒に移動し続け、私の体のほんの一部すら捉える事はなかった。見逃さないように集中しているうちに、だんだん気分が悪くなってきた。携帯電話を握る手を目の前に持っていこうと、腕を動かしてみたが無駄だった。視点の動きに耐えきれなくなつて目を閉じようとしたとき、目を閉じる事も出来ないことに気づき、もしかしたら、私は眼球だけになってしまったのかもしれないと思い、恐ろしくなった。体がガタガタと震えるのを感じたが、震える体を見ることは、もちろん出来なかった。私は泣いていて、手の甲に涙の感触があった。はたと、涙腺は瞼にあるはずなのに、眼球だけになってしまった私が、どうして泣く事が出来るのだろうかと思議に思った。そう思った途端、私は意識を失った。

そこで目が覚めた

(後書き)

起床後、鮮明に覚えていた夢を文章にしたもの。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9301z/>

眼球

2011年12月29日01時55分発行